雪隠免許（※1）

手塚忠太右衛門は武道の達人であるが、この人の家に住み込んでいる門人の山名熊四郎はなかなか武道がよくでき、既に免許以上の腕前であった。

しかし、免許はなかなか許されないので熊四郎は、先生であり主人である忠太右衛門に、それとなく免許のことをお尋ねすると「ではいつでもいいからすきを見て、一本参ったという目に合わせたら免許をやろう」との返事、それから熊四郎は、すきを見て先生を打ち込もうとするがなかなか油断もすきもない。

先生のお供をして行くとき、今日こそはと後から打ち込もうと木刀に手をかけると、先生は後ろをひょっと見てにっこりと笑われる。また、すきを見て今度こそと思うと「駄目、駄目」とやられる。

こうした日が続いたある日、熊四郎例によって庭の掃除をしていると、先生が腹下しをされたらしく、度々便所に行かれる様子、「しめた」と、熊四郎ははだしのまま便所に「先生」といってとびこんだ。先生びっくり「許す」とおっしゃった。やがて、先生は便所から出てこられると熊四郎を呼ばれた。熊四郎は「許す」とはおっしゃったものの裸足で座敷を歩いたので叱られるのだとおそるおそる先生の前に出た。先生は、「熊四郎、あの気持ちを忘れるな」とついに免許を授けられ、そして士分（※2）にとりたてられた。

それからずっと後のことである。弓の三五兵衛先生と連れ立って品川付近に遊びに出かけたところ、隣席にいた相撲取りがわざとけんかを吹きかけ、衆を頼んで刀のこじりをけって「勝負せい」とどなった。三五兵衛先生は後を振り返り、「熊四郎やるか」「あんげ言うかりやりやんしゅ」と言って、先生を側に腰かけさせておいて、さっと相手の中に飛び込み、またたく間に3人を川の中に投げこんだ。

相手がこれに恐れて逃げ腰になったところで熊四郎は、「先生、さあ逃げましょう」と言って2人は麻生の邸（※3）ま

うらへ

でどんどん走って帰った。このさし手といい、引手といい、これも熊四郎の免許以上の腕前の見せどころであっただろう。

（採話：蓑江地区　手塚隆吉）

平成3年3月発行　たかなべむかしばなし第3集

※1 雪隠：便所のこと。厠（かわや）ともいう。
※2 土分：江戸期の武士階級のうち正規の武士身分を持ったものを指す。公的に苗字を名乗り帯刀することが許された。
※3 麻生の邸：江戸（現在の東京の前身）の麻生藩邸

柔道の大家　山名熊四郎重広のこと

山名家4代目当主の、山名重房の弟熊四郎は、幼い頃から、武術が好きでした。特に柔道が、得意でした。若いころ江戸へ出て修行を重ね、宝山流の免許皆伝（※1）をうけて、郷里の高鍋に帰ってきました。

このことが、藩公（秋月の殿様）に認められて、新しい土地15石を賜り、住居を〝脇〟に与えられ、藩公の守護役として、秋月家に名を連ねました。又、殿様の指図で、泥谷家より嫁をとりました。

常に、藩士の武術の指導に当たり、忠勤をはげみました。武術が大変勝れ、人望も高かったのですが、藩士の中には、それをねたみ、心よく思わぬ者もいました。その中に熊四郎を、亡き者にしようと、たくらむ連中が集まり、彼を殺すくわだてをしました。

ある夜、本家（横筑）から、夜も更けるころに、夜露を踏みながら、脇の自宅に帰る途中の出来事です。大手門から宮田裏の大濠ばたの松並木のところまで来たとき、松の木の上に隠れていたくせ者が、さっと飛びおりるやいきなり熊四郎に切りつけてきました。

太刀（※2）は、熊四郎の首のあたりに、切りつけられましたが、その切りおろした太刀が、火花を散らして〝カチーン〟と、音をたててはねかえりました。

熊四郎は、1歩飛びさがり、攻撃の体勢に構えて忽ちにして飛びかかり、敵を投げとばし、生け捕りにしました。敵のかぶりものをとってみますと、驚いたことに藩内の若侍です。熊四郎は大変びっくりしましたが、まわりにいた数名の者も呼びよせ、こんこんとさとした上で、悠然として、わが家に向かって、去っていきました。

このことがあってから、熊四郎の名は、益々高くなり、藩内の若侍を中心に、若い者達が教えを請うようになり、柔道に熱中し、武術が益々盛んになったということです。

後でわかったことですが、熊四郎は、本家から帰る時いろりの火箸を借り、まげのところに下げて、防具に使っていたのでした。

この火箸は、その後藩の稽古場に、保存されてあったといいます。

筆者、山名勝重（※3）が12才の頃、祖母に勧められて、脇の山名敬助宅に通い、柔道のけい古に熱中していたが、当時のけい古場は、家の前の坪ん外（庭）に、古い畳を敷いたものだったが、その広さは十畳程であった。

尚熊四郎は、敬助老人の曽祖父に当りその当時は、失明しておられた。（急性緑内症だったと聞く）

（採話：小丸地区　山名紫川）

昭和61年8月発行　たかなべむかしばなし第1集

※1 免許皆伝：師匠が弟子にその道の奥義を残らず伝え、その修了を認めること。
※2 太刀：平安時代以降の刀（反刀）のこと。
※3 山名勝重：高鍋町小丸に眼科医院を開業していた人物で名医といわれる。高鍋町の先賢の一人。昭和11年眼科医業一切を譲り、余生を趣味に生きた。紫川と号し、明治から昭和にかけて高鍋の世相・風俗を生き生きと描写。紫川絵日記、高鍋城図などの遺作がある。

『たかなべ伝・伝リターンズ』では、当時、高鍋町の高齢者ボランティアグループ「ふるさとを伝える会」のみなさんが、高鍋町内の故老をたずね歩き、記録・作成した物語を紹介しています。

令和6年12月20日発行　発行　高鍋町教育委員会　社会教育課　高鍋町大字上江8335番地2　TEL 0983-23-3326

デザイン・イラスト：ごとうきよ